

## 全体主義からみた企業の社会的責任とマーケティング（前編）

竹 内 由 佳\*

### Corporate Social Responsibility and Marketing from the viewpoint of Totalitarianism (Part.1)

Yuka Takeuchi

#### 要約

これまでの企業の社会的責任に関する研究のほとんどは、経営学もしくは会計学の視点から行われていた。しかしながら、それだけでは、多くの企業が企業の社会的責任を果たすことができない理由を説明することが難しい。それゆえに、本稿は、哲学の視点より企業の社会的責任について考察する。

キーワード：企業の社会的責任、全体主義、哲学

#### (Abstract)

Most previous researches about Corporate Social Responsibility were conducted from the viewpoint of Management or Accounting. But it is difficult to explain the reason why many companies cannot fulfill their Corporate Social Responsibility only by this strategy. Therefore, this paper considers Corporate Social Responsibility from the viewpoint of Philanthropy.

Keywords : Corporate Social Responsibility, Totalitarianism, Philanthropy

---

\* 提出年月日2014年11月28日、高松大学経営学部助教

はじめに

今日では、企業はその倫理的活動やモラルマネジメントを公開することを社会から期待されている（竹内（2011））。しかしながら、それに反するかのように、企業不祥事についてのニュースを耳にすることは数多いように感じられる。そのような企業不祥事の背景、発端、その後の経緯、会社の対応、警察・検察の動き、裁判等を詳述したものに、齋藤憲監修（2007）『企業不祥事事典—ケーススタディ150』がある。これは、戦後から2007年までの企業不祥事の「代表的事例」を収録しているものである。これの3ページの「監修に寄せて」の部分において、「本書は新聞やTV、雑誌などで取り上げられ、報道されて話題となった不祥事を、「企業」という視点で括って整理したものである。」と書かれている。つまり、この齋藤（2007）は、あくまでも新聞やTV、雑誌などで取り上げられた企業不祥事だけを整理した資料であることがわかる。よって、新聞やTV、雑誌などで取り上げられなかったような、受け取る人間にとっては軽微だと思われる企業不祥事も加えるとするならば、日本における企業不祥事の事例数は軽々と150件を超えてしまうと考えられる。また、あくまでも齋藤（2007）は戦後から2007年までの企業不祥事を取り扱っているが、日本においても、戦前より企業不祥事は起きていたことは、大倉（2013）より明らかである。

企業不祥事が起こるたびに、企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility：以下CSRとする。）についての議論が実務業界においても学術業界においても起こっている。しかしながら、上記のことからもわかるように、CSRを果たすことは非常に困難であることが推測される。

CSRについての議論は、経営学や会計学の立場から行われることが多い。それらの立場からCSRについて論じる場合、そのほとんどが企業の戦略としてCSRをどう果たすべきであるのかについてといったような、戦略ツールとしてCSRを利用する（竹内（2010）、Woodman（2011））ことを所与とした研究や、株価や売上、利益とCSRの因果関係の有無についての研究（例えばLee（2007））に終始することとなる。しかしながら、多くの企業がCSRを果たすことができない理由について、これらの研究からは知見を得ることはできない。

それゆえに、本稿では、これまであまりCSRの議論においてアプローチされてこなかった哲学文献、その中でも主に、マーク＝ローランズ（Mark＝Rowlands）の『哲学者とオオカミ 愛・死・幸福についてのレッスン』とハンナ＝アーレント（Hannah＝Arendt）

の『責任と判断』を利用しながら、CSRの議論において非常に重要であると考えられる「全体主義（Totalitarianism）」について論を深めていく。

マーク＝ローランズ（Mark＝Rowlands）『哲学者とオオカミ 愛・死・幸福についてのレッスン』

まず、マーク＝ローランズの『哲学者とオオカミ 愛・死・幸福についてのレッスン』について説明する。

この文献は、筆者であるマーク＝ローランズ自身がブレニンというオオカミと10年以上暮らした際の記録である。彼がアラバマ大学で哲学の准教授をしていた際、「九六パーセントのオオカミの子ども売ります」という新聞広告を目にし、ブレニンを「ATMで下ろしてきた五百ドル」で買い取ったのである。

この筆者は、ブレニンを飼い始めてからは、大学の講義にでさえブレニンを連れて行っており、その際の学生とブレニンとの関係についてなども所々で触れられている。最終的に、筆者とブレニンはアメリカ合衆国からアイルランド、イングランド、フランスへと共に渡り、ブレニンはフランスにてその生涯を閉じたという。

一見すると、ただの男性とオオカミ（といってもオオカミの血が九六パーセントの犬であるとも言えるのかもしれないが）が共に暮らした記録でしかないが、筆者は「この本ではまた、人間であるということが何を意味するのかについても語りたい」と綴っている。「生物学的な存在としての人間ではなく、他の生き物にはできないことができる生き物としての人間」を描くことをも、この文献の目的としているのである。なぜそのようなことができたのかというと、ブレニンというオオカミと一緒に生活することで、自分すなわち人間が「クリアリング」されるからである。ここで言う「クリアリング」とは、筆者の言葉を借りるならば、「隠れて見えなかったものを、見えるようにしてくれる」ことであり、「わたしたちが自分自身について語る所説ストーリーの中に隠れているもの、所説が暗示していても明言はしていないものを、オオカミが明るみに出してくれる」ことを示している。つまり、オオカミと暮らしたことで、筆者は人間というものを認識できたのだと言える。

オオカミとの生活によって「クリアリング」された人間というものは、「サル之魂をもっている」ということが、筆者がこの本において述べようとした人間とは何であるかの部分を指し示している。「サル之魂」という言葉のうちの「魂」とは、「わたしたちが自分自身

について語る所説の中に露呈されているもの」であり、「なぜわたしたちがユニークなのかについての所説、どんな反対証拠があろうと、わたしたちが信じ込んでしまう所説の中に露呈されるもの」である。それらの所説は「明らかにサル的な構造、テーマ、内容をもつ」とされる。

また、「サル」とは、筆者は一種のメタファーとして利用しており、「世界を道具の尺度で理解する傾向の具現化」であると定義している。例えば、「物の価値を、それが自分に役立つかどうかで測」ったり、「生きることの本質を、公算性を評価し、可能性つまり自分の目的のために使うことのできるものの集合と見なす」ということが、「サル」であるということである。「サルには友だちはいない。友の代わりに、共謀者が」おり、「サルは他者を見やるのではなく、観察」し、「観察している間じゅう、利用する機会をねら」っているのである。その「サルの魂」によって、人間は「自分の幸福についても、測定できる何か、量や質を測ることができて計算できる何かだと思うの」である。そして、「愛についても同じように考える。サルは人生で一番大切なものも、コスト・利益分析の視点から見るとしている。すなわち、他者は自分より「よりサル的である」といったように、「サルの魂」の強弱はあるものの、人間は誰しも「サルの魂」を持っていると筆者は述べているのである。逆に、オオカミは、筆者に対して「人生で最も重要なものは、決して計算ずくでできるものではないことを教えてくれる。真に価値があるものは、量で測ったり、取引できないことを思い出してくれる」存在なのである。

「サルの魂」を持っていることは、決して悪いことばかりではない。なぜなら、「サルの魂」を持っているがゆえに、文明を手に入れることができたとも言えるからであると筆者は述べている。しかしながら、文明を手に入れることができたようなサルは、謀略をたくらんだり、人を騙したりする能力にまで長けてしまうようになったのである。オオカミの喧嘩は、単なる暴力性からであるだろうが、人間の争いは必ずしもそうではないことから、この考えは導くことは容易である。それゆえに、「サルだけが唯一、道徳的な動物となる必要があるほどに不愉快な動物」であるのだと考えられる。

この人間の「道徳」というものについて、筆者であるローランズはさらに考察を進めている。人間の罪、邪悪とはどのようなものであるのかという話の中で、筆者は実に「サル的」な邪悪について触れている。それは、「自分の義務を果たさない」ことでなれる邪悪である。その邪悪は二つに分けることが可能である。一つは、「道徳的な義務を果たさないという不履行」という邪悪である。ここで挙げられている義務とは、「身を守ることが

できない者を守る義務」である。例えば、子どもが病気にかかっているというのに、親が病院に連れて行かないというものが挙げられる。それが邪悪であるということに関しては、事情によって罪が軽減されるかもしれないが、無罪にするわけにはいかない。しかし、はるかに実際は多いのではないかと考えられるのが、「哲学者が認識的義務と呼んでいる」義務の不履行である。それは、「自分の信念を適度に批判的に検討する義務」であり、今日の私たちはそれを「ほとんど評価しない」ため、「たいていの人はこれが義務だとは思っていない」のである。例としては、アーレントが用いたようにユダヤ人収容所に関連するアイヒマン裁判（Arendt (2003)）が挙げられる。もっと身近なところで言うならば、小学校のある学級の中で明らかにイジメが起こっていたというのにも関わらず、教員が「自分にはそのイジメを見つけることは不可能だったのだ。」と涙ながらに主張するようなことも、「自分の信念を適度に批判的に検討する義務」の不履行であると言えるだろう。

これら両方の邪悪について考えると、「特権を与えられた幸福なハーヴァード大学の心理学者、精神の領域における専門家とされる人、人類のために尽くすという気高い意志からだけ行動すると思われていた人にも、邪悪はついてまわる」と、筆者は述べている。これらの邪悪に関する記述は人が「サル」を持っているということと関連があると考えられる。先にも述べたように、「サル」であることは、文明をもたらした。その一方で、策略を仕組み、友だちを友ではなく共謀者であると認識し、人を騙す能力を伸ばしてしまったことが、「サル」であったが故の人間の本質であると考えられるかもしれない。だが、筆者はここで意志の問題を持ち出す。「人間がもたらす邪悪のほとんどは悪だくみの結果ではなくて、道徳的な義務や認識的な義務を果たそうとする意志が欠けた結果」であると述べているのである。「意図的な悪意が人間の邪悪な行為で重要な役割を果たしているのは確か」であるかもしれないが、「その行為の実行そのものにおいてというよりも、むしろ、行為を実行できるように場を整えるところにおいて」意図的な悪意が重要な役割を果たしていると主張しているのである。我々の持つ「サルの悪意」は、「相手に無力さをつくりだすこと」で、「自分自身の悪意の可能性を創出する」こととなるのである。

## 小括

ここでは、ローランズの『哲学者とオオカミ 愛・死・幸福についてのレッスン』を用いて、「オオカミによるクリアリング」を通じた人間の本質についての説明を行った。そして、人

間とは「サル之魂」を得たため、文明的である反面、悪意を通じて相手を無力にし、自分自身の悪意の可能性を創出することができる存在であるということを読み取ることができた。

これらの人間の本質に関する描写に関しては、続きで触れることとなるハンナ＝アーレントの『責任と判断』の中でも再考することとなる。アーレントは、『責任と判断』において、先にも出たアイヒマン裁判やナチス、またソクラテスの例を取り上げながら、人間の道徳とはどのようなものであるのか、個人の責任とは何なのかについて考察を進めている。その中でも、多くの企業がCSRを果たせない理由と密接に関連しているであろう「全体主義」という見方について詳細に述べていきたい。CSRを果たせない、すなわち企業不祥事をもたらしてしまう組織に存在するのは、個人である一人ひとりの人間である。その一人ひとりの人間がどのようなメカニズムの上で、「全体主義」と定義される、組織の歯車の一つに変化していくのかについて詳細な説明を得ることで、企業不祥事をもたらす組織に対しての知見を得ることが可能となる。

そして、「全体主義」という見方から企業がCSRを達成することが難しい理由が明らかになると考えられる。また、企業活動の中核をなしているマーケティングでは、CSR自体を広告や戦略的ツールとして有用であるというのが学術的にも実務においても通説となっている（竹内（2010）、竹内（2011））。しかしながら、達成が難しいCSRを戦略的に利用するということは、CSRの本質から見ても離れた使い方になっているということは否めないのではないかと考えられる。この点については、別稿において議論する。

#### 参考文献

- Arendt, H. "Responsibility and Judgment", edit by Kohn, J., George Borchardt, Inc, New York, 2003. (『責任と判断』、中山仁訳、筑摩書房、2007年。)
- Lee, P. M. "A review of the theories of corporate social responsibility: Its evolutionary path and the road ahead", *International Journal of Management Reviews*, 10/1, 2008, P.53-73.
- Rowlands, M. "The Philosopher and the Wolf : Lesson from the Wild on Love, Death and Happiness", Guranta Publications, 2008. (『哲学者とオオカミ 愛・死・幸福についてのレッスン』、今泉みね子訳、白水社、2010年。)
- Woodman, C. "Unfair Trade The Shocking Truth Behind 'Ethical Business'", Random House Business, 2011. (『フェアトレードのおかしな真実 僕は本当に良いビジネスを探す旅に出た』、松本裕訳、英治出版、2013年。)
- 大倉幸宏 『「昔はよかった」と言うけれどー戦前のマナー・モラルから考えるー』、新評社、2013年。
- 齋藤憲監修 『企業不祥事事典ーケーススタディ150』、日外アソシエーツ、2007年。
- 竹内由佳 「コーズリレーテッド・マーケティングが企業と消費者の価値共創に与える影響ー株式会社 フェリシモの事例よりー」『神戸大学大学院経営学研究科修士論文』、2010年。
- 竹内由佳 「マーケティングと企業の社会的責任」、『季刊マーケティングジャーナル』、第119号、第20巻、第3号、2011年。

## 執 筆 者 紹 介

|             |                       |           |
|-------------|-----------------------|-----------|
| O.Baterdene | モンゴル国経済開発省投資政策局       | 主 任       |
| 丸 山 豊史      | 高 松 大 学 経 営 学 部       | 教 授       |
| 山 口 直木      | 高 松 大 学 経 営 学 部       | 准 教 授     |
| 岡 本 丈彦      | 高 松 大 学 経 営 学 部       | 助 教 授     |
| 澤 田 文男      | 高 松 大 学 発 達 科 学 部     | 准 教 授     |
| 津 村 怜花      | 高 松 大 学 経 営 学 部       | 准 教 授     |
| 花 城 清紀      | 高 松 大 学 経 営 学 部       | 助 教 授     |
| 藤 井 明 日 香   | 高 松 大 学 発 達 科 学 部     | 講 師       |
| 岡 耕 平       | 滋 慶 医 療 科 学 大 学 院 大 学 | 講 師       |
| 川 崎 紘 宗     | 高 松 大 学 経 営 学 部       | 講 師       |
| 竹 内 由 佳     | 高 松 大 学 経 営 学 部       | 助 教 授     |
| 向 居 暁       | 高 松 大 学 発 達 科 学 部     | 准 教 授     |
| 森 享 子       | 高 松 大 学 経 営 学 部       | 非 常 勤 講 師 |
| 井 上 範 子     | 高 松 短 期 大 学           | 教 授       |
| 小 西 博 子     | 高 松 短 期 大 学           | 准 教 授     |
| 藤 井 雄 三     | 高 松 短 期 大 学           | 講 師       |
| 溝 渕 利 博     | 高 松 大 学 発 達 科 学 部     | 准 教 授     |

### 研 究 紀 要

第62・63合併号

平成27年 2 月25日 印刷

平成27年 2 月28日 発行

編集発行

高 松 大 学

高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841-3255

FAX (087) 844-4759

印 刷

株式会社 美巧社

高松市多賀町 1-8-10

TEL (087) 833-5811